

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄県における高校中退者・不登校生徒の進路意識に関する総合的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 藤原幸男</p> <p>公開日: 2009-07-28</p> <p>キーワード (Ja): 学校評価, 高校中退, 進路意識, 沖縄文化, 中退体験, 青年期, 学校改革, 生活設計, シマ共同体, アイデンティティ, 適格主義, 深夜アルバイト, 教師の対応, 学区制, 適格者主義</p> <p>キーワード (En): Okinawa historical-cultural structure, consciousness on life course and school, adolescence, school evaluation, highschool dropout, school reform, identity, school dropout experience</p> <p>作成者: 藤原, 幸男, 照本, 祥敬, 長谷川, 裕, 村上, 呂里, 三村, 和則, Fujiwara, Yukio, Terumoto, Hirotake, Hasegawa, Yutaka, Murakami, Rori, Mimura, Kazunori</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p><a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/11529">http://hdl.handle.net/20.500.12000/11529</a></p>

### Ⅲ 高校中退者の進路意識と沖縄県の経済構造

三 村 和 則

#### 1 高校中退者の進路意識と生活設計

##### (1) 高校教諭の捉えた高校中退者の進路意識と生活設計

高校中退後編入学した生徒を担当する、県立のA定時制高校教諭に藤原幸男と三村和則でインタビューを行った。これは、後述する、中退を経験した生徒へのインタビューの予備的作業として位置づけられる。

インタビュー内容の要旨は次の通りである。

##### (1) A高校午前部の特徴について

A高校には沖縄の高校中退問題の縮図がある。単位制高校であることから、入学者に他の高校を中退した後、編入した者が多く、また、その中から多くの中退者が出ている。

退学と休学の区別は今日、客観的な基準ではなく本人の意思に委ねられている。それ故、A高校ではこれまでの基準では中退とされてきた者の多くが、休学扱いになっている。沖縄県の潜在的中退者を集め、本来中退となるべき者を休学とすることで沖縄県の中退率を低く押さえておく役割をA高校が果たしているといえる。最近の中退率は2.9%だが、A高校の「堰」がなければ簡単に3%を越すだろう。

現在休学者の数が累積しており、彼らの指導に当たるため、教員の加配が行われている。

##### (2) A高校における在学者の実態

入学別に分けると、インタビューに協力いただいた教諭のクラスでは、42人中、一般入学者が25名、編転入生が17名である。

一般入学者の特徴は、中学校時に、適応指導学級出身者、中学時不登校、低学力（入試

合計0点)、非行経験有り、欠席多い、という傾向の者が多い。彼らは、入学後、中退や休学へと至る傾向が強い。

編転入生の特徴は、専門高校出身者で、ここでのクラブ活動挫折者が多い。編入生は元退学者であり、転入生は元休学者である。いわば、「退学予備軍」という可能性が高く、事実、再び中退や休学となることが多い。

しかし、互いに同じ境遇に身を置き、学力や生活態度や価値観が同じである生徒が多いため、在学を続け、人格形成を遂げていく者もある。

A校は、制服がなく校則も緩やかで、単位制なので、授業は異年齢集団が基本である。このため、編転入者にとって居心地は悪くない。なお、異年齢集団と居場所の関係について補足する。一般の高校では、同年齢集団が基本なので、そこに原級留置の生徒がいると、わずか1年の違いでも、年齢差を気にし、居心地を悪くし、退学となるケースが多い。

母子家庭または父子家庭で、生活保護を受けている家庭の子どもで、親の権威や教育力がない子どもが在学者に多い。また、卒業後定まった就職先を探そうとする者が少ない。また、20代で月々10万円の収入でも「恵まれている」と感じている者も多く、定職志向を弱めている。

中退後あるいは卒業後、本土の季節工となる者も多くいる。半年本土で季節工をし、半年沖縄で失業保険で暮らすという生活である。それに対する周囲の目は寛容である。

##### (3) 中退の原因について

編転入者の理由は、女子の場合、結婚や妊娠のため、男子の場合、深夜業（スナック、

居酒屋、ガソリンスタンド)で生活のリズムを壊すため、主である。

深夜業が多いのは、技能を必要としない反面、高校生としては高給であることと、かつての同級生の目を気にしなくてよいからである。

#### (4) 中退対策について

課外のクラブ活動や生徒会に参加している者は中退していない。一般に部活動の低迷している高校は中退が多い。クラブ活動や生徒会活動へ参加させる取り組みを重視している。

以上をとおして、筆者の考察は次の通りである。

#### (1) 学校的秩序にそぐわない一群の存在 (階層問題)

卒業予定者の多くが定まった就職先を得ようとはしないという。求人はあるが、応募しないのである。容易に無職やバイト暮らしとなる。見通しをもって自己の人生を設計することができないのが彼らの共通の特徴ではなからうか。

見通しをもって自己の人生を設計するとは、何事においても目標を持ち計画を立て実行する経験の上に積み上げられるものと考えられる。その経験はまさに現在の学校秩序の代表格ではなからうか。

彼らは「目標を持ち、計画を立て実行する」経験がないから、就職に際して見通しを持っていないのみならず、それまでの学校教育でも疎外されつづけてきたのではないか。さらに、彼らの出身階層に目を転じると、そもそもその出身階層に「目標を持ち、計画を立て実行する」という規範が乏しいとすれば、その意味から彼らは学校の秩序になじみにくいというハンデを背負って学校に入学してくるのではないのだろうか。入学後はそのハンデとの闘いが必要だが、それは家庭で日々再生産され、学校教師はその克服ならず、放置してし

まうのである。

#### (2) 人生設計の地域的特徴

半年、本土での季節工で暮らし、半年は沖縄で失業保険とアルバイトで暮らすという生活を営む者が多い。彼らに注がれる周囲の許容的なまなざしが気になる。他府県と感じ方が違う。沖縄は、日本的な雇用慣行である、終身雇用制や年功序列賃金制(すでに、多国籍企業経済化の中で崩壊しつつあるが)を正統的とみなす就職観と人生観が未形成または存在しない土地柄なのではないか。また、実態としてもそうした雇用慣行をとる就職先が他府県と比べて少ないということもあるのではないか。そうしたことが、中退を助長していると考えられる。

#### (3) 高校教育観についての共感と違和感

本インタビューをさせていただいた教諭は中退対策として、生徒の居場所づくりを行っている。教育の内的・実質的事項からの改善である。その点は、共感できる。しかし、単位制・無学年制ということもあり、クラスでなく部活動と生徒会(執行部)を居場所とみなし、そこを拠点に生徒を学校につなぎ止めようとしている。だが、それらは本来任意参加のものである。そこに様々な事情で加われない者には居場所はないことになる。また、学校教育活動の主領域をしめるのは教科の授業ではないか。教科授業の改善にこそ力を注ぎ、そこを居場所にするのが、本来の姿ではないだろうか。

進路指導が大学進学指導だけになっているのではないかと思わせられるところにも、違和感があった。教諭の語る「進路目的の明確な生徒」というのは、大学進学をめざす生徒のことであった。また、「大学は自立が不要だから進学指導できる。職場は自立しておかないと難しいので、指導が困難」とも述べていた。後者について、高校から見た大学像を知る上で興味深い。また、今日の学生気質の

形成の一要因を知る手がかりともなり得る。しかし、それはともかく、進路指導とは、進学か就職かにかかわらず、生徒の自立の指導を意味するのではないだろうか。明確な就職先のある生徒が育てられていないこと、また、それが困難であることは何を物語るのだろうか。

(インタビューは、1996年10月1日午後8時から9時30分まで、沖縄国際大学にて行った。)

## (2) 高校中退後編入学した生徒の進路意識と生活設計

前記、A定時制高校教諭の紹介した高校生にインタビューを、次のような観点から行った。

- a 高校に進学した理由及び退学した理由
- b 20代、30代のライフ計画(見通し)をどのように持っているか、またそれをどのように形成してきたか。
- c ライフ計画の形成と学校教育はどう関係しているか
- d 中退や転職に関する意識(中退や職場を転々とする事についてどのような意識を持っているか。周囲の目は許容的か) 高校生のプロフィールとインタビュー内容の要旨は次の通りである。

### 高校生のプロフィール

- ・男性(22歳)
- ・那覇市立C中学校卒業
- ・B工業中退。2年後A高校定時制午前部入学
- ・休学、休学の間本土季節工(この1年間。初の経験)
- ・現在復学中(「頑張っても再来年3月には卒業可能という単位取得状況」)
- ・現在バレーボール部所属(「部に所属していることが学校に繋ぎとめてい

る。)」

- ・現在スナックのアルバイトもしている。
- ・両親健在だが、「教育力と経済力が無い」。妹と弟がいるが、兄と同様である。
- ・「本人の生き方に両親も友だちも許容的・ウチナー的」

### インタビュー内容(概要)

#### (1) B工業高校(電気科)⇨中退⇨A高校定時制⇨休学

B工業では、アルバイトをやっている生徒が多い。一緒に頑張ろうと言っていた友だちも急に来なくなったりした。自分もアルバイトを始めた。1年のときに留年。やる気が空回りした。留年した年の四月。まだ留年生と知らないの、学級のみんなは同級生として扱ってくれた。ところが、体育の授業のとき、遅刻して、遅刻した他の3名と一緒にだったが、「留年してもわからんのか」と先生に言われて、殴られて、そのときから留年生とわかって、学級のみんなは、とくに友だちだった他の3名は、同級生意識から上級生意識へと対応が変化。先生からもボスに見られて、邪魔扱いされた。自分は全然ボスということではなかった。同級生としてのつきあいをしてほしかったのだが。結局おもしろくなくなって、退学。

中退後2年間のブランク。その間に居酒屋のアルバイトとステーキ屋コックをした。居酒屋は続いたが、ステーキ屋はおもしろくなくてすぐ辞めた。居酒屋の客にA高校夜間部の先生がいて、「A高校で勉強できるんじゃないか」とアドバイスしてくれた。ここで、高校に編入できる道があることを知った。高校資格を取る道があることを知った。弟がA高校に通っていたこともあって、友だちをつくりたいという気持ちもあった。中学の卒業

式るときは病気を患っていて、出れなかったの  
で、「卒業式っていいなあ」という憧れの気  
持ちもあった。部活もやりたいし（中学の  
ときにバレーボールをやっていた）。A高校で、  
B工業高校のときに取った単位も認められ  
る。早く卒業ができるのがいい。

将来設計については、取り合えず学校に  
通ってという気持ち（10代はまだ同じ年齢の  
者と生活したい、部活したいという思いが  
強い。「学ぶ」〔教科学習〕のためだけに学校  
があるのではないということか——。）

A高校では、ちがう年齢層の友だちがいて、  
居心地がよい。それに基礎から教えてくれる。  
先生の接し方もまるっきり違う。A高校では、  
夜バイトができるので、午前部の方が人気  
がある。家庭の経済的苦しさがあって、生活  
費を稼ぐために休学。怠学から季節工にな  
ったのではない。休学は理由があれば可。でも、  
わりと簡単にできるように思う。今年の後期、  
復学した。

## (2) 本土季節工の生活

小学校からの友だちの紹介で滋賀のダイハ  
ツに季節工に行った。ダイハツが雇うのでは  
なく、派遣会社をとおして入った。若い人が  
多かった。自分以外の人は、「借金返済のため」  
「親のもとで生活するのがおもしろくない」  
という人が多い。月に寮費1万円で、寮の食  
堂で食事。半年契約で、自分は半年契約を2  
回やった。仕事は塗装で、中塗りだった。沖  
縄からはダイハツの2工場合わせて800から  
1000名が行っている。季節工の8割が沖縄  
から来ている。派遣会社の人に聞いてわか  
った。沖縄から来ているのは若い人が多く、  
ほとんどが独身。半年働いて半年沖縄で、  
が多い。車を買うための人もいる。

季節工に行ったのは、家族の生活費を稼  
ぐというお金のこと以外に、気分転換もあ  
った。「しばらく生活してみたい。そうで  
ないと、自分がだめになる」という気持ち

もあ

## (3) 将来の進路意識・人生設計

将来は、自営業をやってみたい。飲食業  
を35歳までに。自分の店をもちたい。卒業  
後は、いまの仕事続ける。いまは、2:00~  
5:00までの部活（バレーボール）、5:00~  
9:00まではタコ焼きで、10:00~朝の4:  
00までスナックで働いている。いまの  
仕事はアルバイトという感じではなくて、  
仕事になっている。仕事をしながら、客  
との付き合い方、仕入れの方法などを聞  
いている。経営についてもかじっている。  
（「専門学校できちんと勉強した方がい  
いんじゃないの？」と聞かれて）本・ノ  
ートで勉強するよりも身体で学んだ方  
が身につく。それに専門学校は学費が高  
い。

（「将来設計のモデルになる人はいるの？」  
と聞かれて）店長。店長は25歳で店を持  
っている。いま28歳で3年店が続いてい  
る。数カ月でつぶれる店も多く、3年  
もつのはよい方。

## (4) 家族のこと・友だちのことなど

お金を稼いで一応の目的に達したので復  
学した。復学して、いまは「行かなければ」  
という気持ち。周りの目もある。「いつ  
まで高校に通っているのか。アルバイト  
ばかりでは駄目でしょう」と強く言う  
人が親戚のなかにいる。しかしその人  
は、しっかりした家庭の親戚（公務員）  
。でも親戚の子は、大学を卒業しても  
仕事が見つからなかったりしている。  
父は土木、母は水商売（雇われている）  
。親戚の人と比べると両親は別に何  
も言わない。父は、「いつまで学校に  
行くのか」といつつ、「20歳を過ぎて  
いるから考えていることもあるだろ  
う」と言っている。多くの親戚もこ  
う言っている。学費は自分で払って  
いる。祖父は司法書士をしていて、亡  
くなった。母方の祖母は、「高校に入  
ったからには卒業しなさい」と言っ  
ていたが、しかしあまり強くは言わ  
ない。

（地域の友だちは多いの？と聞かれて）中

学を卒業して引っ越してきたので、地域の友だちはいない。C中学の友だちは少ない。エイサーはやりたいけど、どこでやっているかわからない。(いつ頃卒業?と聞かれて)あと1年半。周りの友だちはアルバイトを探すのも大変。学校への募集はほとんど県外。県外は時間的にきびしいし、通勤ラッシュにもついていけない。一度会社を休んで、朝のラッシュを経験してみた。歩く人の流れが速くてついていけなかった。電車のラッシュはものすごく、奥へ奥へとなかに押し込まれた。

ちゃんとした会社に入った友だちはいない。沖縄では、大学を卒業しても、道路工事をしている人がいる。

B工業へは、親に勧められて入った。父が自分と一緒に仕事をしようと言っていた。「工業高校だったら仕事はある。電気関係をしたい。」と思って。D工業に行きたい気持ちもあったが学力が低くて。それにあちらは電子だし。それで家から遠いけどB工業にした。B工業での中退者は、(アルバイト)の仕事に追われてとか、仕事楽しくなってが多い。

(1996年12月8日(日)午前10時30分から12時まで、那覇市内のレストランで、藤原幸男と三村和則で行った。インタビューの前半は、A定時制高校教諭も同伴した。)

以上通して、筆者の考察は次の通りである。

高校中退者に注がれるまなざしは比較的あたたかいことがわかった。中退者を採用する側の意識にも、実力を重視する傾向があることが伺えた。そこから沖縄県に高校中退者が多い原因の一つは、県内企業等が学歴をリジッドな基準にした採用を行っていないからではないかと考えた。

また、滋賀県のダイハツの工場で働く季節工約1000人の内8割が沖縄出身者であるということがわかった。沖縄県の雇用現状に特徴

的なデータである。このことと高校中退とに何らかの関連があることが推測される。つまり、季節工は高校中退者でも採用し、その賃金水準は沖縄の平均的県民所得よりも高く、また、失業時の一時金も県内で生活するにはあまり不足しない実態がある。そのことが、中退の促進要因の一つになっているとも考えられる。

## 2 「沖縄型出稼ぎ」および沖縄民間企業の雇用慣行と高校中退問題

上記の考察に基づき、季節工の実態と終身雇用制や年功序列賃金制を導入している企業などの割合を調査した。

### (1) 「沖縄型の出稼」の実態と特徴

沖縄県商工労働部職業安定課でインタビューを行い、以下の、同課作成の「沖縄県における出稼労働問題について」とその説明から、本県には「沖縄型の出稼」という特徴的な傾向があることがわかった。

### 沖縄県における出稼労働問題について

#### 1. 出稼労働の特徴

##### (1) いわゆる沖縄型の出稼

- ①出稼労働者の大半は30歳未満。
- ②農業等との兼業ではなく、出稼専業がほとんど。
- ③通年で出稼に行くこと。
- ④出稼を繰り返し行う者が多い。

##### (2) 就労先は輸送用機械器具を中心とした

製造業が中心であり、建設業が少ない。

##### (3) 就労先は中京及び京浜地区が中心であり、

両地域でその大半を占める。

#### 2. 理由及び原因等

##### (1) 県内産業構造等に起因するもの

- ①大企業が少なく零細企業がほとんどである。
- ②製造業が脆弱であり、サービス業に傾

斜していること。

職率は53.1%、全国平均39.8%)

(2) 県内労働市場からみた原因等

- ①失業率（特に若年者）が高いこと  
（平成7年の失業率5.8%、失業者数33,000人、若年者が51.5%を占める）
- イ. 新規学卒者の就職決定率が低い。  
（平成8年3月高卒で60.0%、全国平均96.4%）
- ロ. 毎年無業者が大量に生じること  
（平成7年3月高卒では29.5%、5,185人が無業者）

- ②県内の雇用需要が少ないこと
- ③賃金レベルが低いこと（平成7年全国の77.9%）

(3) 出稼労働者個人の面からの理由等

- ①県内就職志向が非常に高い（年々高まっている）  
（平成9年3月高卒予定者の求職動向調査では、75.2%が県内就職希望）
- ②若年者でも高い収入
- ③県外常用雇用を敬遠する傾向が高い
- ④県外就職をしてもUターン率が高い
- ⑤県内企業に就職しても離職率が高い  
（平成4年度新規高卒者で3年後の離

4. 出稼労働の問題点

- (1) 短期就労を繰り返す潜在的失業者が多い
- (2) 景気の変動を受けやすいこと
- (3) 特に若年者の場合は人生設計、職業生活の点から問題が多い

5. 出稼労働に対する対策

- (1) 出稼相談員の配置（東京及び愛知）
- (2) 地域相談指導員の配置
- (3) 就労前の健康診断及び安全講習会の実施
- (4) 職業安定所での職業相談の際の常用雇用への指導
- (5) 社会人及び職業人としての教育・指導  
（県外就職情報センターの実施する職業講和話
- (6) 高校新卒者を対象とした「学卒就職情報システム」を平成3年度より導入し、学卒対策の充実・強化をはかっている
- (7) 若年出稼者に対する指導強化（平成5年度より若年者就職指導員を配置し、きめ細かな職業相談を行い、常用就職を促進している）

3. 最近の傾向

	県外就職者数(A) (含む出稼)	臨時・季節工の就職者数(B) (出稼)	(B) / (A) (%)
昭和60年度	9,388人	5,846人	63.3
61	4,804	3,628	75.5
62	7,486	5,870	78.4
63	10,411	8,993	86.4
平成元年度	13,172	12,129	92.1
2	14,205	13,277	93.5
3	12,332	11,431	92.7
4	9,373	8,413	89.8
5	5,621	4,689	83.4
6	6,737	6,035	89.6
7	7,213	6,617	91.7

「沖縄型の出稼」とは、他府県にはない固有な特徴を表したものである。それは、イ 30歳未満の若者が多い。ロ 出稼ぎを専業とする者が多い。ハ だから、通年で行ったり、くり返し行く者が多い。ニ 製造業が中心で、建設業が少ない、という特徴をもっている。ニについて、補足しておく、製造業は輸送用機械器具（自動車）や光学器具（カメラ）が中心である。それは、視力を必要とするため、若年の労働力が必要だからだという。

「沖縄型の出稼」の原因は、県内に零細企業が多い、失業率が高い、高卒者を中心に無業者が毎年大量に生じる、県内の賃金レベルが低い、などにあるということである。

「沖縄型の出稼ぎ」は、「季節工」として半年を単位に行われることが主である。半年本土で就労し、半年沖縄で失業して生活するのである。失業している間は、その間の貯金と失業保険に依存して生活することになる。そうすると、失業保険の額はこのサイクルの維持を決定する重要な要因となる。その失業保険の額は、それまでの収入の6～8割の間で、50日分が一時金として一括して支払われるという。この額は、季節工の場合、沖縄で次の出稼ぎまでの半年間、十分生活できる額になるであろうと言われている。

なお、沖縄県の失業率が高いということ、特に、若年の無業者が毎年大量に生み出されるということは、本土の大手製造企業にとって、良質な労働力の安定供給源を確保しているようなものである。もし、これが、米軍基地の存在によってもたらされているとすれば、米軍基地は、こうした意味でも、日本の独占資本の利益となっているのだと言える。

（日本の独占資本にとって、米軍基地は三つの意味を持っていると言える。1、東南アジアに進出した多国籍企業の経済活動の軍事的支援、2、米軍基地に投下された「思いやり予算」の本土企業への環流、3、若年失業者

＝出稼ぎ労働者の供給源づくり）

（インタビューは、1997年2月10日、沖縄県商工労働部職業安定課佐久川政徳氏に行ったものである。）

## （2）沖縄民間企業の一法定年制の実施状況の特徴

終身雇用制や年功序列賃金制を導入している企業などの割合は、県内の労働市場が学歴をどれだけリジッドな基準として、雇用しているかに関連していると、推測される。そこで、その手がかりとして、民間企業における定年制の実施状況を調査した。

この点についての調査結果は別表1（沖縄県商工労働部職業安定課『職業安定行政年報平成7年度』22頁より）の通りである。1995年度、対象企業（常用労働者100人以上。但し、1991年度から50人以上）651社のうち、一法定年を定めている企業は543社で、全体の83.4%となっている。

比較のために、高校中退率の低い石川県の場合、別表2（石川県商工労働部職業安定課『職業安定行政年報平成8年度』161頁より）の通り95.7%であった。

両県の数字の比較から、沖縄県においては一法定年制を採る企業の割合が低いことがわかる。このことは、日本的な雇用慣行を採用している企業が少なく、そして、それは、学歴をリジッドな基準にして採用している企業の割合が少なくと相関関係があると考えられる。

この推測を裏付ける事実として、沖縄にはサービス業が多く、製造・加工業が少ないことがあげられる。サービス業では、仕事の内容において、資格や技能が不問にされることが多い。今日、資格や技能が学歴と結びついていることを考えると、学歴不問の雇用市場が広がっていることが推測される。そして、このことが、中退者が多い原因の一つになっ



別表1 定年を定めている企業の状況

年度別	企業数	定年を定めている企業				定めていない企業	
		一律定年		その他		社	%
昭和62年度	155	122	78.7	29	18.7	4	2.6
63	197	152	77.2	41	20.8	4	2.0
平成元年度	215	166	77.2	44	20.5	5	2.3
2	217	173	79.4	40	18.4	4	1.9
3	515	422	81.9	72	14.0	21	4.1
4	625	492	78.7	107	17.1	26	4.2
5	641	511	79.7	109	17.0	21	3.3
6	654	532	81.3	107	16.4	15	2.3
7	651	543	83.4	98	15.1	10	1.5

別表2 定年制の有無及びその決め方の推移

(%)

項目 調査年月日	定年制あり	定年制なし		
		一律定年制	職種別	その他
平成5年6月1日	96.2	95.6	3.4	1.0
6年6月1日	96.3	96.0	3.3	0.7
7年6月1日	97.1	95.7	3.6	0.7
8年6月1日	97.5	95.9	3.4	0.7

ているのではないかと考えられる。

### (3) 沖縄の公共職業安定所の求人状況の特徴

県内の労働市場が学歴をどれだけリジッドな基準としてみなしているかを、知る手がかりとして、次に、公共職業安定所（ハローワーク）の常用雇用者の学歴要件を調査した。

求人票から、学歴の重視度を知ろうとする場合、基本的な職業紹介は公共職業安定所で行うが、総てではないことに留意しなければならない。門前募集、学校募集などがあるからである。しかし、公共職業安定所の「求人票」で全体の傾向は把握できる。

調査の方法として、高卒は必ずしも必要ないが、高卒にこだわりがちな職種について調

べてみることにした。（1997年2月19日、那覇公共職業安定所伊波卓也雇用開発部長に対して10：40～11：30にかけてインタビューを行い、アドバイスを受けた。）

本県の特徴を知るため、同様の調査を高知県高知公共職業安定所と石川県金沢公共職業安定所でも行った。高知県は沖縄県と同様、中退率の高い県である。他方石川県は中退率の低く、二県とは、対照的な県である。

対象は、いずれも男性の求人票について、アルバイトではなく常用の求人についての調査である。

職業区分は以下の通りである。各安定所によって異なるが、ほぼ同種のものとして識別することは可能である。

a 那覇公共職業安定所で調査した職業区分  
「販売」「運輸・通信」「調理」「ウエィー  
ター・ホール係」「その他のサービス業」  
「一般事務」(男女混合)「営業」

「不問」 件数77、割合33.6%、  
「中卒」と「高卒程度」と「不問」の  
合計の件数84、割合36.7%  
「高卒」 件数129と割合56.3%

b 高知公共職業安定所で調査した職業区分  
「販売サービスの職業」「運送」「事務的  
職業」(男女混合)「営業」

金沢 (1997年11月18日)。512件中、  
「中卒」 件数9、割合1.7%、  
「高卒程度」件数42、割合8.2%、  
「不問」 件数169、割合33%、  
「中卒」と「高卒程度」と「不問」の  
合計の件数220、割合42.9%  
「高卒」 件数263、割合50.2%

c 金沢公共職業安定所で調査した職業区分  
「事務」「販売員」「ガソリンスタンド販  
売員」「建設業・製造業営業員」「卸売業  
営業員」「小売業営業員」「金融・サービ  
ス」「運転手」「調理人」「接客・サービス」  
「ダンプカー・タクシー・フォークリフ  
ト」

学歴別求人状況の調査結果は次の通りと  
なった。

「中卒」「高卒程度」「不問」「高卒」「短大  
卒以上」に分けて調査したものである。「短  
大卒以上」については省略した。

以上を見る限り、公共職業安定所を経由す  
る中途採用の求人において、学歴を基準にす  
る程度に、三県の間で顕著な差異は認められ  
なかった。当初は、顕著な差異が認められ、  
ここにも沖縄県あるいは中退率の高い県の特  
徴が浮き彫りにされるものと、予想していた  
が、その予想はまったく裏切られた。

那覇 (1997年2月19日) : 178件中、  
「中卒」 件数1、割合0.5%、  
「高卒程度」件数17、割合9.5%、  
「不問」 件数59、割合33%、  
「中卒」と「高卒程度」と「不問」の  
合計の件数77、割合43.2%  
「高卒」 件数88、割合49.4%

高知 (1997年2月21日)。229件中、  
「中卒」 件数4、割合1.7%、  
「高卒程度」件数3、割合1.3%、

#### (4) 沖縄県の経済構造の特色と高校中退

求人票調査の結果が物語るのは、やはり沖  
縄県の雇用者でも高校卒業資格を他県並に重  
視しているということである。高卒資格の期  
待感はあるのである。しかし、それにも関わ  
らず、高校中退者が「学歴プレッシャー」を  
強く感じないのはなぜか。やはり、既述した  
ように、沖縄県ではサービス業が中心で、製  
造・加工業が少ないことが、大きな要因だと  
推察できる。